

西光寺だより

第一七〇号 令和六年 十月一日発行

彼の岸に 生まれ往きたる 祖母想う 私の頬を 撫でる西の陽

お彼岸の時期になると、寺院にあるお墓や村のお墓、そして大谷本廟などに、大勢の方がお参りにいらっしやいます。

私たちはなぜ、お彼岸にお墓参りをするのでしょうか。それは大切な方を偲ぶのに、ふさわしい時節のひとつが、お彼岸だからです。

そもそも「彼岸」とは、文字通り、向こう岸のこと。『悟りの世界』を意味する仏教用語です。

お彼岸の時期には、夕日がちょうど真西に沈みますが、お経には、「ここから西の方角のかなたに、お浄土という安らかな『悟りの世界』がある」、「私たちは命を終えるときに、阿弥陀仏という光の仏さまに抱かれて、お浄土へと往生させていただく。そして、阿弥陀仏と同じ光の仏さまに成らせていただくのである。」と説かれています。

先人がたも、お彼岸に「あの人が生まれて往ったお浄土は、あの夕陽の向こうにある」と懐かしく偲びながら、「私も、同じ阿弥陀さまに抱かれて、同じお浄土に往生させていただくのだ」と命の行き先を見つめ、お浄土での再会を確かめてこられたのです。

では、先立たれた方とまた会えるのは、私たちが命を終えた後なのでしょうか。「そうじゃない、今も会っているんだ」と、深く想う縁がありました。

祖母のお葬式の日のこと。

お骨上げに行ったとき、祖母の変わり果てた姿を見てショックを受けました。ついさつき、お棺に花を手向けていたときには、そこに確かにあった祖母の面影が、まったくなくなってしまう。

言葉にならない虚しさの中、お骨を一つひとつ拾い入れ、まだあたたかいお骨壺を抱えて、帰りのバスに乗り込みました。火葬場を出たのは、夕暮れ時。その日は、雲ひとつない快晴でした。バスが坂を登りきり、川を渡る橋に差し掛かったとき、私の黒い衣が、パツと赤く光りました。身体を窓の方へ向けると、美しい夕陽が、揺れる水面をキラキラと輝かせながら、真っ直ぐ私たちを照らしていたのです。それから夕陽を見るたびに、あの時の光景が心に浮かびます。夕陽を眺めているとき、その光は、眺める私に、確かに届いています。優しく、ほのかに温かい陽光。その感触が、いつまでも子ども扱いしてきた祖母の手と、重なるように感じた瞬間がありました。しわしわで細くて、少し硬くて、温かい。あの手で私の頬を撫でながら祖母が話しかけてくれたように想ったのです。

「お浄土に往ったきりではなくて、光の仏さまに成って、ここに還ってきてくれている。」と、沈みゆく陽の光に包まれながら、ありがたく懐かしく、味わわせていただいたご縁でした。

お互いさまに、お彼岸の夕刻には、西に想いを向けながら、大切な方を偲ばせていただきましょう。

《本願寺派布教使

若林

合掌



◆先月の報告◆

①九月十七日（火）みのり講・穂積講の皆さまと大谷本廟墓参に行つてまいりました。まだまだ暑い日が続く中ではありましたが、皆さまとの墓参を味わいながら、手を合わせさせていただきました。



②九月二四日（火）西光寺本堂にて仏教婦人会報恩講法要を厳修致しました。会員20名の方々と、親鸞聖人を偲ばせていただきました。先日、約25年前、西河原を離れられたご家族が西光寺本堂にてお父様の年忌法要をされました。懐かしく今は家もなくなり、ただただ西光寺本堂が、ご自分たちのふるさとと懐かしく手を取り合つて涙しながら、子供の頃を思い出し今元気で生かされていることの幸せをしみめられた大切なご法要でありました。

この西光寺が皆さまの思い出のふるさととして存在することに、親鸞聖人との尊きご縁を改めて思わせていただきました。

そして、会長はじめ役員の皆さまのご協力のおかげさまで、仏教婦人会報恩講を終えることができました。

本当にありがとうございます。

◆十一月の行事◆

・十月 四日（金）

秋季永代経法要

午後二時・七時

西光寺本堂

◎本願寺派布教使 宮部 誓雅 師

・十一月 二三日（土）

報恩講法要

午後二時・七時

西光寺本堂

◎本願寺派布教使 調整中

浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一七一一

電話 〇七二一六二二一四七九四

FAX 〇七二一六二二一九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>